

# テレビはやっぱり マスメディアの ～求める人材はまず体力～

TBSテレビ・スポーツ局 業務推進部次長 武方 直己さん

テレビ局への就職は、今も昔も大変な競争率だ。最難関の女子アナは2000倍とも3000倍とも言われている。男性アナにしても約1000人に1人。TBSの人気アナウンサーとして活躍してきた武方直己=たけかた・なおき=(49)さんは中央大学の卒業生。右記写真のお顔を見て「知ってる、知ってる」と親しみをこめて思い出す人もいるだろう。最近は画面から姿を消した。番組制作を支える立場に回り、テレビの存在価値をさらに高めている。「テレビはマスメディアのNO.1」と言い放つ。その自負はアナウンサーひと筋では分らなかった苦い経験がもたらした。



## おっ、元気がいいぞ

TBSの入社試験。緊張感が増す面接で、中央大学経済学部4年生の武方さんは言い切った。

「声が大きいからです」

面接官の質問は「あなたがスポーツ・アナウンサーに向いているところをあげてください」だった。就職活動では想定内の質問だ。

プロ野球が好き、ゴルフが好きといった返答が多いなか、「声が大きい」との回答は際立っていた。答えるしぐさは自

信に満ちて堂々たるものだった。

中大では文化連盟(当時)の「朗吟会」に所属した。当時部員は3人、部の存続が危ぶまれていたころ入部を勧誘された。いつしか詩吟にはまり、部の創立100周年大会を開催すべく動いた。

詩吟とは、漢詩や和歌に独特の節回しをつけて吟ずる(歌う)もの。信玄と謙信の戦いを描いた「川中島」などが有名で、例えば鞭聲肅々(べんせいしゅくしゅく)夜河を渡る〜♪と文節の末尾に“こぶし”をつけて歌う。

「腹式呼吸」とよばれる呼吸法で腹

の底から声を出す。精神の安定、脳の活性化などの効果もあるという。これを4年間続けてきた。入社試験で「声が大きい」とのアピールには筋金が入っていた。

アナウンサー志望がよく通うアナウンス学校には、集中講座を1週間受講しただけだった。新聞記者になりたくて、毎日新聞記者OBが主宰する私塾にも顔を出していた。マスコミを志望したのは朗吟会の発表会で脚本を書き、表現することにやりがいを感じていたからだ。「詩吟版ミュージカル」とも言っていた。



# NO.1

## 順風満帆なアナ人生

晴れてTBSに入社。アナウンサーとしてテレビ・ラジオで数多くの番組を担当、軽妙な語り口ですぐに評判が立った。情報・バラエティーでは、コント赤信号のリーダー渡辺正行さんや所ジョージさんら売れっ子のタレントと番組を盛り上げた。

「所さんには、常識をあえて破ってみ



赤坂のTBS

る。そこから自由な発想は生まれるということを学びました。都内一等地にある自宅の敷地半分を畑にする人です。事務所は一見ガラクタに見えるものでいっぱい(所さんにとっては宝物だが)。メジャーを段ボールごと買ってみたい、戸棚を作る材料をバイクで買いに行き、背中にくりつけて戻って来たり…普通大人がやらないことをやってみることで“何か”が生まれる」

プロ野球の実況アナウンサーでも存在感を示した。機転がきく、腹から声が出る、メリハリがある。新聞記者に負けまいと取材をして、スター選手のとっておきのエピソードを仕入れていた。取材を通して親しくなった選手はいまや監督やコーチ。武方さんの人柄のよさが親交を長続きさせている。

## 転機が訪れた

「ほぼ理想的なアナウンサー人生でした」

仕事に人生に充実期を迎えて表情

はイキイキ。転機はそうした入社20年の節目に突然訪れた。人事異動である。広報部門・PRセンターへの内示を告げられた。

「アナウンサーを続けるには会社を辞めてフリーになるほかない。会社に残ってこれまでとは違う仕事をするか悩みました。内示日が誕生日でしてね」

よく覚えているという。熟考の末、会社にとどまった。折しも厳しい経済情勢で既存のフリーアナウンサーは苦戦していた。

PRセンターで3年、のちに制作部門へ。ドラマやバラエティー番組の後方支援をした。

「パソコンで入力する伝票処理の仕方が分からない、番組出演者の弁当を用意するのに幾つ必要でどこの店に発注するのか、控え室の手配では利用者が禁煙か喫煙かを確認する…。できないことが多かったです。社会人として成立していなかった。アナウンサーひと筋できて、AD(アシスタントディレクター)の仕事を経験せずにきた」

「“ADやったこと、ないよね”、“アナウンサー上がり”なんて言われたこともありましたが、でも、仕事の借りは、仕事で返す。前夜泣いても翌朝は笑顔で出勤しました」

愛媛・今治西高時代、競技登山(別稿参照)で鍛えた強い精神力があった。不利な状況でもあきらめない。粘った。食い下がった。負けるのは嫌だった。

心して番組づくりの裏方に徹した。TBSが力を入れている陸上競技の世界選手権。五輪に匹敵するビッグイベントだ。2007年「世界陸上・大阪大会」では宣伝プロデュースを担当した。

東京・表参道の目抜き通りや渋谷のビルに番組PRの大きな看板を据えた。



「1千万でそのスペースを買うわけですから、失敗は許されません」。スポーツアナウンサー時代に勝るとも劣らないくらいの充実感を感じたという。

「世界陸上」のメインキャスター、織田裕二さんが笑顔で視聴者に語りかける。あの裏側で武方さんが奮闘していた。その姿は視聴者には見えない。見えないが番組イベントの成功には不可欠だ。

## テレビが求める人材

さまざまな職場からテレビを見つめてきた。テレビ番組には称賛もあれば批評もある。手軽に視聴できるため、取り沙汰されやすい媒体だ。メディアが多様化されて、新聞離れの次はテレビ離れとも言われているが、武方さんは頑として譲らない。

「インターネットよりも何よりも、テレビ屋としてはまだ今はテレビがマスメディアの

N0.1だと思っています」と言い、こう付け加えた。

「それを支えるのがクリエイティブな発想のできる人材です。この業界は40歳を過ぎると最前線から退く。消耗度が速い。仕事の基本は体力、そして気配り、発想力。人が持っていないものを持つ。唯一無二の存在でいてほしい」

経験に基づいた、腹の底から出た言葉。入社を決めた、あの声だった。

## 競技登山

愛媛の今治西高時代はワンダーフォーゲル部でならした。四国山系で有名な石槌山がホームグラウンド。標高1982m。近畿以西では西日本最高峰だ。競技は4日間テントで寝泊まりする。天気図を見る、地図を解析する、消費カロリーを計算する、登山に必要な総合力の勝負だ。「心身ともに極限状態で冷静な判断力を養った。体力づくりにもなったし、何より友を得ました」

## 「バイトはあまりしなかった」

「大学時代、アルバイトはほとんどしなかった。ウエイターをしたくらいかな。やってみるとこれがきつい。お客さんから“灰皿がない、ミルクが固まっているよ”といった苦情を受ける。笑顔で対応しながらも、店の主義主張を守る。大変な仕事です。やってみて分かった」



## 表舞台と裏舞台



(学生記者 宮寺理子=法学部3年)

私たちの質問を頷きながらじっくりと聞き、1つ1つに丁寧に答えてくれた武方さん。さすがは元アナウンサー。とても聞き取りやすい声で、ずっしりとした重みのある話がずっと耳に入って、心にまで染み渡った。

一番印象に残ったのは大きな転機についての話だった。入社してから約20年、スポーツ番組、ラジオ番組などさまざまなアナウンサーとして出演してきた。しかし、43歳になった時、会社の人事異動で「会社員として残るかフリーになるか」の選択に迫られたのだという。

「前向きに、まだ放送業界の中で自分が知らないことがあるんじゃないか、自分の仕事としてできることがあるんじゃないかと思って『宣伝』という部署で仕事することに決めました。自分が表に出るばかりではない放送業界の他の楽しみ方、仕事の仕方を学んでみようと思って」

### ●つらくともやってよかった

アナウンサーが華やかな表舞台だとすると、制作は裏舞台。もちろんアナウンサー時代もさまざまな苦労を乗り越えて進んできたが、裏舞台に回って気づかされたことも多いという。

「社会人の基礎がまだまだできていなかったと気づかされました」

番組放送前にも出演者・スタッフ全体に目を配り、小さなことにも気を配る。

当たり前のようなことが、できていないことに気づいたという。

「ADを経験せずにいきなり宣伝プロデューサーになったので、例えば出演者のタクシーはどのタイミングで何台呼べばいいのか、控え室がいくつ必要で喫煙するか否か、その申請書は社内どこに出せばよいのかなど、全体の細かな気配りが必要なんだと気づきました。辛かったこともありましたが、やってよかったと思っています」

表舞台があればそれを支える裏舞台がある。武方さんの話を聞いて、表と裏の2つがあって1つの舞台として成り立つのだ、と実感した。

放送業界だけでなく、他企業もそうだろう。契約をとりまく営業もいれば、オフィスで事務を執る人もいる、どちらが偉いなんてこともない、どちらが欠けても会社は成り立たない。

私は大学3年になり、12月に就活が始まる。目に見える部分を見るだけでなく、その裏を含めて自分ができること、自分がしたいことを考え、就活をしていきたいと強く思った。



(学生記者 <sup>ひるま</sup> 晝間祐亮=法学部3年)

「自分がアナウンサーに向いていると思った点は声大きいこと」この言葉が印象に残った。

私は中央大学多摩キャンパスに通っている。自然に囲まれたキャンパスである。取材日、多摩から港区赤坂にあるTBSへ向かう。電車の中から見る景色は都心に近づくにつれて、どんどん表情を変えていった。

テレビ局というと「華やかな世界」と感じている人も多いだろう。私自身がそうだった。TBSに着いただけで気分は高まっていた。中大に着いたからといって気分が高まることはあまりないのに、テレビ局、TBSとは不思議な場所である。

武方さんは笑顔で私たちを迎えてくれた。話し方も優しく、聞いている人を飽きさせない。さすが元アナウンサーである。冒頭に書いたコメントが一番印象に残った言葉である。

### ●ありのままがいいんだ

面接試験場で面接官に「あなたのどんな所がアナウンサーに向いていますか」と聞かれて言った。「声大きいこと」。何も飾っていない言葉に感動した。その言葉は就活が現実のものとなってきた大学3年生の心に深く響いた。

無理に格好付けることなんて必要ない。ありのままの自分をさらけ出す。それがその人の個性であり、その人の色となるのだ。

型にはまった時点でその人の個性という色は消されてしまう。「いろいろなことにチャレンジしてください」武方さんが今の学生に伝えたいことだ。実際自分で経験してみることが、その人の個性へとつながっていく。経験することでその経験にあった色を手に入れていく。

手に入れた色が混ざり合うことによって唯一無二の自分という色が出来上がるのである。

一方で無理に混ぜなくても単色でも良い色はあると思う。今回の取材で思ったことは、自分はどんな色なのだろうか。自分の色は目に見えるものではないし形があるものでもない。私の色はおそらく、まだ混ぜている途中だろう。混ざりきる前にいろいろな色を足して唯一無二の「晝間」という色を作っていこうと取材の後に決心した。



(学生記者 熊谷百夏=法学部3年)

TBSの入館証を首から下げた学生記者は、緊張しながら6階のスポーツ局へ向かった。笑顔の武方さんが迎えてくれた。カジュアルなスタイルが私たちの緊張を和らげてくれる。

「こちらです」と案内されたところはロンドン五輪一色だった。取材日は7月30日、五輪競技第4日時点。取材テープの入ったラックがたくさん積まれ、他局放送がリアルタイムで同時にチェックできるモニターがいくつも並んでいる。

見慣れない様子に圧倒されていると、さらにびっくりした。「私が朝出勤して

くると、この廊下に若いADが何人もグタッと寝ています」東京とロンドンの8時間の時差に追われ、迫りくる締め切り時間と戦う。仕事が終わると疲れがどっと出て、自宅に帰って眠るよりここで今すぐ寝たほうが良いと思うそうだ。

### ●表現したい

武方さんがアナウンサーになるきっかけは、中大「朗吟会」での脚本執筆、スポーツサークル「メッツ」での活動などを通して、「ものを書いたり表現したりすることに興味があった」という。

就職活動の当初は新聞記者を目指し、毎日新聞記者OBが主宰する私塾に通い、タテヨコの人間関係を築き、就活にもそれが役立ったと話す。アナウンス学校は1週間の集中講習を受けるのみだったというから驚きだ。

話を聞いていて、就活面接でアピールする具体例が出た。

「学生時代で一番力を入れたことは?と聞かれることが多いと思うが、大事なのは、こんな素晴らしいことをしてきましたという結果だけでなく、活動を通して自分が何を得て、それが就職後御社にどう役立つかを熱意と自信を持って面接官に伝えること」と武方さん。採用面接で「声大きいことが強みです」と言い、身につけた腹式呼吸を堂々とアピールした経験がある。

テレビの将来像にも言及してくれた。さまざまな角度からテレビ、ラジオに携わり、経験を積んできた。「最近、インターネットやSNSなどさまざまな媒体が出てきたが、マスメディアの中でテレビはまだまだナンバーワンであると思うし、そう信じたい」との言葉には説得力があった。

これから就活を本格的にスタートさせる3年生としては、社会人としても中大生としても偉大な先輩の話は参考になる点が多かった。

キャリアを重ねていく上で自分のして



きた仕事に誇りを持つ。私たち学生が将来目指すべき姿を武方さんにみた。

### 貢献の気持ち、 個性を大切に



(学生記者 田中佑樹=理工学部3年)

武方さんの話を聞いて、喜劇王チャップリンの映画「ライムライト」のワンシーン、「バラは美しくありたくて咲いているのではない。バラであれと強く望むことがバラを美しくしているのだ」というセリフを思い出した。

自らがメガホンを取った名作恋愛劇にはチャップリンの心情が滲み出ている。

社会人の強さを感じた取材だった。アナウンサーとしての20年間は自分のやりたいことが出来た楽しい日々であったと語っていた。ところが入社20年目の7月10日、まさに誕生日に人事異動の通知が来る。ここからアナウンサーとしての表舞台から制作側としての裏舞台への第2の人生が始まった。

アナウンサー時代とは全く異なる環境での道は、けっして平坦であるとは言えなかったと武方さんは語る。ときには「アナウンサー上がりだから…。ADやったことないでしょ」などと嫌味を言われたこともあったという。

#### ●仕事の借りは仕事で返す

苦境を乗り越えたのは「仕事の借りは仕事で返す」という思いがあったからだ。この言葉に私は強く感銘を受けた。

人は苦しいときほど視野が狭くなりがちである。明日を生きるためにどうにかし

て生き延びようとする。しかし、それは往々にして自分を苦しめてしまうことになってしまう気がする。

仕事で借りを返すということは誰かに貢献しようとすることである。この貢献の気持ちが明日への活力となり、また枯れることのないエネルギーになっていくのだと思った。

次に印象に残った事はTBSの入社試験の面接での出来事である。スポーツアナウンサーの面接ということもあり、競馬や野球を話題にする受験者が多かったという。そのような中で武方さんは「声が大きいことに自信があります」と答えた。詩吟会で培った自信があることを堂々と言うことが出来たのだ。

私は大学3年生でこれから就職活動が控えている。貢献の心を忘れず、自分の中の個性を大切に挑んでいきたいと思う。

### 考えさせられた 今の自分



(学生記者 武内優里子=法学部2年)

「テレビ業界の人間として、自分たちはメディアの中でテレビが一番であるという誇りはあります。しかしメディアは変化の時代。その中で生き抜く発想力を求めている」

インタビューの中で武方さんの口から発せられた言葉が今でも私の中で残っている。

メディアは今、大きな変化の中の過渡期にある。かつては新聞・ラジオ・テレビというメディアが一般的であった。その先にあったインターネットの発展は一言に“新しいジャーナリズム”と表現することには賛否両論分かれるが、紛れもなく

新しい発信のあり方の出現を意味し、われわれは知りたい情報を容易に、しかも即時に入手することが可能な時代を生きている。

この時代の中で武方さんは「ニュースソースとしての新聞は減びることはない」と断言していた。確かにテレビやネットで流れる情報源は新聞が主であり、速報性はネットに劣るが、情報に信憑性と重みがある。それに比べるとネットの情報は次々に更新され速報性に優れる代わりに、一つ一つの情報が軽い。

#### ●信頼できる発信源

ではその中でテレビというメディアの立場をどう捉えるのか。われわれは変化の過渡期の観察者として、また実際に利用する当事者としての立ち位置を相互に行き来しながら、この問いについて考える必要がある。

なぜならメディアという媒体を通してしか社会全体を捉えることができない以上、社会の構成員として一人一人が本当に信頼できる発信源を選び取っていく必要があるからだ。

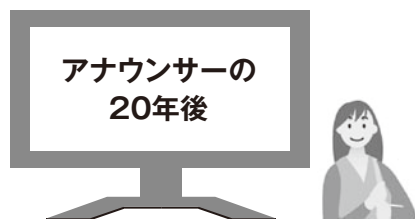
メディアが発する情報を元に私たちはそれぞれが考える「社会」を形作っていくために、情報の劣化が私たちの知性の劣化に繋がりがねない。テレビというメディアが本当に私たちにとって信頼のおけるメディアかを常に考える必要があるし、その存続、さらなる発展のためにテレビというメディアに関わるとすれば、人とは違う発想力を持つことが求められるのだろう。

ツイッター(Twitter)と連動するテレビ番組の出現、ネット上で情報を発信するようになった新聞社…これらに続くアイデア、それも、視聴者、読者の心をつかむアイデアが求められている。

「いましていることの中から何を学ぶ

かということが大切」この武方さんの言葉は学生の立場にある私たちにとってとても重みのある言葉であった。メディアのあり方を含め、多くのことが目まぐるしく変化する時代だからこそ、いま手の中にあるものを大切にしないまま、新しいものに手を伸ばす傾向にある。しかし本当に大切なことは、何をしていたとしても、そこから自分が自分の視点を持ってどれだけのことを得られるかということ。

いま目の前にあることに臨む自分自身の姿について、思わず考えさせられる余韻のある言葉であった。



(学生記者 石崎春日子=文学部1年)

中央大学にもアナウンサーを目指している学生が大勢いるだろう。その人たちに、今回私の聞いた話をぜひ伝えたい。



武方さんは、アナウンサー人生20年目の節目の年にアナウンサーを卒業した。フリーになってアナウンサーを続けていくか、会社に残り制作側としてTBSを支えていくか。選択を迫られた。結局、会社に残る選択をし、テレビ番組の制作やPRなどを担当している。

### ●そんなことあるんだ

この話を聞いたとき驚いた。アナウンサーとして入社したら、定年までずっとアナを続けるものだと思っていた。賞味期限がある職種といわれることもある。ずっと続けていけるわけではないのだ。

制作側にまわったことをマイナスとは捉えていない。表舞台から裏舞台にまわって気づいたことがたくさんあったという。一からのスタートとなったわけだが、そこで「社会人としての基礎ができていなかった」ことに気づかされた。そして「仕事の借りは仕事で返す」というスタンスでカバーしていき、成長することができた、と語っていた。

「放送する」「伝える」ことは楽しいと話した。TVというメディアを通して視聴者に「何か」を伝えるという点ではアナウンサーも制作側も一緒である。TV人として表舞台も裏舞台も経験できるということは良いことだと感じた。

転機はいつか訪れる。これからアナウンサーを目指して頑張る中大生に知ってほしいことである。武方さんの今後のご活躍をさらに願うOB訪問だった。



(学生記者 竹田響=総合政策学部1年)

武方さんは学生時代から興味のあることに積極的に取り組んできた。経済学部にながら法学も熱心に勉強していたという。

学生へのメッセージは「自分にしか出来ないことを磨いてください」だ。

入社面接でアピールした「声が大いから」には、ある考えがあった。「他人とは違う“何か”を表現すること。それがその人のオリジナリティであり、“個性”です。そんな独創性のある発想が必要ということです」

### ●人脈は大事

もう一つ大切にしてきたのが人脈である。日常生活、アルバイト、就職活動…全ての場面において人との繋がり的重要性を強調した。

「人と違うことができる人、人よりも(いい意味で)目立つ人材を企業は求めている。自分らしさを大切にしてください」

指針となる言葉だった。



## 会社概要

2013年採用では、2012年夏にも採用機会を設け、採用を計2回とした。留学終了後に帰国した学生や「学業が忙しく就職活動が思うようにできなかった学生」(TBS人事部)が、テレビ局への就職を熟考できるよう配慮したという。この夏採用は、HPによると募集職種は一般(制作、報道、情報、スポーツ、営業、事業など)。応募資格で新卒・既卒を問わない。